

# 高知大学附属小学校と大学の連携型学習による リズムダンスの実践研究

常行 泰子<sup>1)</sup> 岡本 さちよ<sup>2)</sup>

1) 高知大学教育学部

2) 高知大学附属小学校

## A Practical Research of the Rhythm Dance classes by the Type of Collaborative Learning of Elementary School with Faculty of Education and Kochi University

TSUNEYUKI Yasuko (Faculty of Education, Kochi University)

OKAMOTO Sachiyo (Elementary School with Faculty of Education, Kochi University)

### 要 約

社会体育領域においては、HipHop やストリートジャズ、Funk の動きを中心とした現代的なリズムダンスが子ども・青年期において人気の高い運動・スポーツ種目となっている。本研究では、高知大学附属小学校と大学が連携して現代的なリズムダンスの体育授業を実践し、授業内容・展開の特色や教育効果、今後の課題について検証することを目的とした。高知大学附属小学校体育館において小学校2年生と4年生を対象にダンス授業を展開し、観察と映像分析を基に検討した。その結果、基礎的知識と技能の事前学習が実践的な指導力育成に必要であり、展開におけるレイヤリング手法は小学校低学年・中学年に有効であった。さらに、発達障害の児童も含めて、体育授業への積極的な参加が認められ、現代的なリズムダンスは子どもが主体的に取り組める教材になり得る可能性が示唆された。

**キーワード：**連携型授業、現代的なリズムダンス、実践研究、学校体育

### 1. 目的

2008年3月、中学校学習指導要領の改訂により武道・ダンスを含めたすべての領域が必修となった。新学習指導要領におけるダンスは、「創作ダンス」「フォークダンス」「現代的なリズムのダンス」からなり、表現や踊りを通じた交流や仲間とのコミュニケーションを重視した楽しさや喜びを味わうことのできる運動とされる（文部科学省，2013a；中村ら，2014）。小学校では、表現・リズム遊びと表現運動が既にカリキュラムとして導入されていたものの、学校教育の現場では運動会や文化祭の体育的活動を中心にダンスが実施・展開されてきた経緯がある。特に上記3本柱のうち、現代的なリズムダンスについては、これまで単元学習として低学年・中学年で実施されておらず（図1）、正課授業内容・展開について検証することは学術的・社会的意義が高いと期待できる（酒向ら，2015）。近年はICTや地域等をフィールドとした連携・協働学習が増加傾向にあるが、体育・スポーツ教育領域は発育発達や技術面の相違があるため、校種を超えた授業実践の機会はそれほど多く

小学校			中学校		高等学校		
1・2年	3・4年	5・6年	1・2年	3年	入学年次	次の年次	それ以降
体づくり運動			体づくり運動		体づくり運動		
器械・器具を使つての運動遊び	器械運動	器械運動	器械運動		器械運動	器械運動	
走・跳の運動遊び	走・跳の運動	陸上運動	陸上競技		陸上競技	陸上競技	
水遊び	浮く・泳ぐ運動	水泳	水泳		水泳	水泳	
表現・リズム遊び	表現運動	表現運動	ダンス		ダンス	ダンス	
ゲーム	ゲーム	ボール運動	球技		球技	球技	
			武道		武道	武道	
			体育理論		体育理論		
	保健領域		保健分野		科目保健		

**\*学習指導要領では、選択となる領域は、器械運動、陸上競技、水泳、球技、武道、ダンスの順で示されている。**

図1 体育の分野 小学校から高等学校までの指導内容（文部科学省, 2013b）

はない。長谷川（2019）は、地域プロスポーツチームと連携したアウトキャンパススタディについて実践研究を行い、地域連携の重要性を示唆した。学生や院生の専門性に応じた実践的指導力を育成する学習の機会は、将来の進路選択にも有益な影響を及ぼすものと期待でき、教員志望学生においては、学校教育をフィールドとしたアウトプットの機会増加が期待されよう。高知大学教育学部においては、教育実習以外にも観察実習・支援実習・応用実習等の学校教育現場での学習機会が多く確保されている。附属学校園である小・中・特別支援学校における各校種とも密接な教育・研究を進めており、学生・院生のみならず、児童・生徒における高い教育効果が期待される。よって本研究では、高知大学附属小学校と大学が連携してリズムダンスの実践研究を行い、授業内容・展開の特色と教育効果及び今後の課題について検証することを目的とした。

## 2. 方法

### （1）指導対象者

高知大学附属小学校において、2年生140名と4年生38名を対象に授業を実施した。

### （2）指導日・場所

2012年5月30日（水）、同6月1日（金）高知大学附属小学校体育館

### （3）授業のねらいと研究体制

- ① ダンス（現代的なリズムダンス）の領域学習において、楽しさと喜びを感じて自己表現する。
- ② 教員志望学生が、専門的ダンスの指導について観察、補助指導を行う。

研究体制：主たる授業実施者：高知大学教育学部教員（ダンス指導歴 17 年）

授業補助者：高知大学大学院教育学専攻大学院生 1 名・教育学部学生 1 名

その他：高知大学附属小学校教員 2 名（授業担当及び観察）

なお、本研究は附属小学校教員の要望で主たる授業実施者は高知大学教育学部教員としているが、保健体育教員を志望する学部生・大学院生の実践的指導力育成は重要課題であるため、授業補助者として学部生・院生各 1 名が本授業に参加し、補助指導を行った。

#### （4）分析方法

授業終了後に大学教員と小学校教員を含めて振り返りを実施した。また、ビデオカメラ（SONY Handycam HDR-CX270）にて授業を撮影し、録画映像を視聴して分析を行った。

### 3. 結果と考察

#### （1）授業概要

本研究に先立ち、大学院生と学部生の事前指導を大学にて実施した。ダンスプログラムの展開について、生涯スポーツの観点から、①安全性、②効果、③楽しさ、の 3 要素（図 2）から構成する点を教授し、一過性の傷害のみならず、中長期的なスポーツ障害（例えば、リズムカウントによる頸椎や膝関節への負担等）について留意するよう関連情報を伝達した。

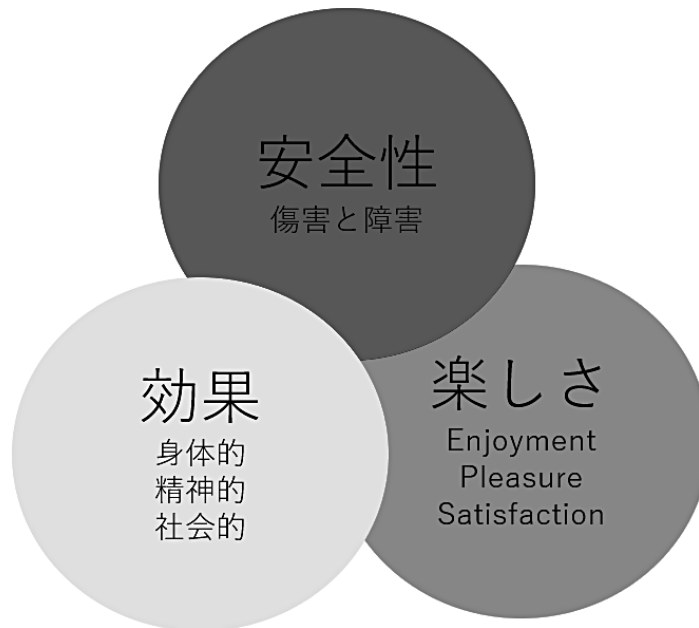


図 2 ダンスプログラム構成の 3 要素

ウォーミングアップとクールダウンでは、ダンス学習のメインにおける使用筋群を中心に実施する旨を伝達した。児童の「楽しい！またやりたい」という回答が得られるような授業展開について協議を行った。学習フローについて表 1 に示す。

本研究では、指導補助者として、大学教員以外にもダンスを専門領域としない教育学専攻の大学院生と教育学部学生が携わったことから、陸上や球技におけるウォーミングアップとクーリングダウンの動きをアイスブレイクに導入するよう構成した。また、コリオグラフィー（振付）については、ひとまとまりにせず、レイヤリングで展開するよう大学教員が指導した。レイヤリングを実施

したのは、小学校低学年・中学年が対象であること、ダンス経験児童が少ないと予想されたことが理由である。

- 1) 目標 高知大学の教員や院生・学生と一緒にリズムダンスを体験し、仲間と一緒に楽しさを共有する。
- 2) 準備物 体育の服装、体育館シューズ等
- 3) 学習フロー  
学習フローは、表1のとおり授業内容と展開方法を構成した。

表1 授業内容と展開方法について

	学習活動・内容	指導者・留意点等
事前	集合、授業概要の説明  自己紹介	小学校教員よりリズムダンス内容・展開について説明を実施  大学教員・院生・学部生による自己紹介
導入 (7分)	1. ウォーミングアップ (ストレッチ、パーガージェンケン、骨盤回し) 2. ペア、グループの動き 3. リズム取り	大学教員・院生・学部生のローテーション指導 曲:HIP HOP(BPM 100)
展開 (33分)	4. アップ・ダウンリズム応用 (スロー/早取り、上肢ミックス、ポップコーン) 5. アイソレーション (肩、胸、骨盤) 6. コンビネーション  7. ステップ (キック、ボックス、クラブ、ポップコーン) 8. グループワーク (ウェーブ) 9. 練習 10. グループごとに発表、見せ合い	大学教員指導  大学教員指導・院生補助指導  縦一列に並び、時間をずらして上半身を回す カノン(集団性の変形:螺旋状の動作をグループで実施)  対面指導、背面指導の一部導入、面の変化  10人程度で横一列、4グループでウェーブの練習を実施  鑑賞、拍手
まとめ (5分)	11. クールダウン (ストレッチ、深呼吸) 12. 終了の挨拶	学部生補助指導  大学教員・院生・学部生
事後	振り返り	意見交換 振り返り実施

本研究に出席した児童の多くはダンスへの興味・関心が当初少なかったものの、終了時における「ダンスは好きになりましたか?」という問いかけに全員が挙手している状況が示された。授業の風景について写真1及び写真2に示す。学習活動・内容のうち、「3.アップ・ダウンリズム応用」から「8.グループワーク」「9.練習」「10.グループごとに発表、見せ合い」の場面において、笑顔で動

く児童が多くみられるなど、展開に至るまでのウォーミングアップが児童のレディネス（準備性）を高めた状況が明らかにされた。特に、児童同士を観察した際のペアやグループ活動における児童の躍動感が顕著であるなど、他者との関わりにおいてダンス・表現への熱心な取り組みがみられ、本授業がダンス・表現への興味・関心を高めた可能性が推察された。



写真1 ペアでの動き



写真2 対面指導の様子

## （2）事後分析

授業終了後のヒアリングでは、小学校教員から子どもの状況が具体的に示され、集団活動における観察結果が下記のとおり口述された。

「子どもらは楽しそうでしたね・・・いつもと違う感じが良かったのかも。特に、あの子は発達障害抱えてて、普通の体育ではあまり他の子たちと一緒に活動ができないんです。でも今日は、なんとか他の子に混じって一緒にやろうとしていたから」

「4年生に比べると、2年生はね、まだ集中力が・・・」と、学年による興味・関心の違いも別の教員より指摘された。中学校・高等学校と比較すると、小学生を対象とした現代的なリズムダンスや表現の実践的研究に関する蓄積は未だ浅い。社会体育領域におけるダンスプログラムは、現段階で小学校中学年以上を対象としていることが多い。今後の応用研究として、低学年の発育発達に応じたダンス・表現の授業や教材開発を検討する必要がある。

大学院生はダンスをテーマとした研究を進めるにあたり、「子どもの様子が良くわかりました・・・舞踊学ではなく、体育科教育の視点で研究をすすめたい」と述べ、「難しかったけど・・・慣れないから。でも、とても良い経験になりました」と学部生が回答した。「子どもが楽しんでくれたのが一番良かった」と振り返りで両者が回答した。本研究の参加がはじめてのダンス指導であったものの、事前の準備とトレーニングを十分に行っていたため、児童らがスムーズに活動する展開が可能になったと推察される。教員自身がダンス・表現を実施できることと、質の高い授業展開は、同次元で議論できるものではない。大学での理論・実践と共に、小・中・高・特別支援の教育現場における実践的学習の機会が、専門科目の実技技能と指導力に関して有益な効果をもたらしたと推察される。将来の進路等についても、本授業における補助体験が動機付けに一定の影響を及ぼした可能性が示唆された。

また、映像の振り返りから、レイヤリング手法の有効性は小学校低学年児童に有効であることが判明した。本研究で用いたステップは、子どもを対象とした現代的なリズムダンスの入門レベル～

初中級レベルであった。犬飼（2017）が指摘する伝達指導型は、ある程度のダンス経験も必要な場合があることを考慮すれば、規定の動きを8カウントまでの最小限に抑え、身体の動きや音楽の楽しさを伝えた点は、児童の表情やノリの良いリズム動作から質の高い指導方法であったと思われる。

今後は、子どもの発育発達段階に応じた、動きや音楽の選択が一層重要になると考えられる。子どもを対象とした研究では、“Enjoyment” “Pleasure” “Satisfaction”等の変数を適用して運動・スポーツの楽しさを分析した国内外の知見がいくつかみられる（Jooyeon et al., 2018; 山路, 2019）。今後は、リズムダンスや表現に特有の「楽しさ」の下位概念を実証的に明らかにすることで、子どもを対象としたダンス教育における質の向上に貢献する知見が得られるものと期待できる。

#### 4.まとめ

本研究は、高知大学附属小学校と大学が連携してリズムダンスの授業を実践し、授業内容・展開の特色と教育効果及び今後の課題について検証した。大学教員と小学校教員、院生・学部生による授業実践の結果、以下の点が明らかになった。

- ① 院生と学部生においては、基礎的知識と技能を事前に十分学ぶことで、実践的学習の有効性を高めた点が示唆される。
- ② レイヤリング手法は、小学校低学年・中学年の児童に有効であった。
- ③ リズムダンスは、発達障害の児童も含めて、子どもが主体的に取り組める教材になり得ると考えられた。

本研究では、高知大学附属小学校の児童を調査対象としており一般化はできない。しかしながら、リズムダンスは、不慣れな院生・学部生においても補助指導が可能であり、楽しさや満足感を児童と共に享受できる有効な教材になり得ることが明らかになった。

#### 謝辞

本研究にご協力を賜りました高知大学附属小学校児童の皆様にご心より感謝申し上げます。また、ご指導を賜りました高知大学附属小学校の先生方や校長・教頭先生のご理解とご協力にご心より感謝申し上げます。

#### 引用・参考文献

中村なおみ・内田匡輔・宮本乙女・中村恭子・布施典子・坂上香苗（2014）中学・高等学校におけるダンス教育推進に向けての調査及び取り組みについての研究：授業とクラブ活動へのアプローチ．SSFスポーツ政策研究, 3(1), pp.230-239.

文部科学省（2013a）武道・ダンス必修化。

[http://www.mext.go.jp/a\\_menu/sports/jyujitsu/1330882.html](http://www.mext.go.jp/a_menu/sports/jyujitsu/1330882.html)（2019年11月22日閲覧）。

文部科学省（2013b）学校体育実技指導資料第9集「表現運動系及びダンス指導の手引」。

[http://www.mext.go.jp/component/a\\_menu/sports/detail/\\_icsFiles/afieldfile/2013/10/30/1336655\\_02.pdf](http://www.mext.go.jp/component/a_menu/sports/detail/_icsFiles/afieldfile/2013/10/30/1336655_02.pdf)（2019年11月23日閲覧）。

酒向治子・出原智波・平田麻里子・猪崎弥生（2015）教師と教師教育者の協働による男女共習「現代的なリズムのダンス」授業づくりの試み．岡山大学大学院教育学研究科研究集録, 158, pp.169-181.

犬飼己紀子・田玉雅美・橋爪みつる（2017）保健体育科教員養成課程における「ダンス」授業と学生の変容－体験型学習法による授業記録から－．教育総合研究, 1, pp.169-179.



Jooyeon Jin, Joonkoo Yun and Stamatis Agiovlasis (2018) Impact of enjoyment on physical activity and health among children with disabilities in schools. *Disability and Health Journal*, 11(1), pp.14-19.

久保泰雄 (2019) 情報の授業をしよう！ 中学におけるタブレット端末を活用した、学習における思考プロセスの可視化 ―産官学連携 京都 ICT 教育構築プロジェクトにおける取り組みから―. *情報処理*, 60(11), pp.1120-1126.

長谷川尋之 (2019) 地域プロスポーツチームと連携したアウトキャンパススタディの実践報告 *地域総合研究*, 20(1), pp.171-179.

山路晃代 (2019) 小学校の表現運動 心を開放し、即興的に自分のイメージを表現する楽しさを実現するために：子どもの思いをつなぐ授業づくり (ダンスがひらく学びの世界 主体・対話・創造：人生に生きる深い学び) (表現・ダンス実践研究) *女子体育* [60]・61(12・1), pp.22-27.

